

リ排除スルノ目的ノミニ止マラスレテ必ズ体温調節作用
ノ一分ヲ擔當スルヤ明カナリ（此間枚舉モラレタル諸賢
例ハ略ス）
此外ニ色々生理的ノ皮膚ハ最モ要ナル機關デ有ル
ヲ證明スルニ足ル所ノ動物試験又人ノ皮膚面積幾
カ火傷ヲ負フキハ死ニ至ル等ノ事實ガ有リマス
皮膚ハ簡様ニ生物体ニ取リテ必用ナル機關デ有ル故ニ其
衛生清潔ニスルヲ等ノ緊要ナルヲハ無論ナリ此レニ付
キテハ又早晚御話申シマス

○ 陸奥龜岡探究記

若 林 勝 邦

龜岡ハ陸奥西津輕郡西北ノ丘陵中ニアル一小村ナリ然レ
モ此地古ヨリ世ニ名ヲ知ラル、モノハ厚古代土器數多ヲ
發見スルヲ以テナリ余等テ其土器ヲ見ルニ其質ハ本邦石
器時代ノ遺蹟ヨリ發見セラル、モノニ異ナラス而ノ其精
巧ナルハ余ノ疑ヲ存セシ所ナリ然ルニ此土器ハ古來ヨリ

好事家ノ藏スル所トナリかめがねカニ屬ト稱ヘ其精巧ヲ賞
セシモ何故ニ龜岡村ヘ此等ノ土器ヲ發見シ得ルヤ何故ニ
此土器ハ繩紋アルニカ、ハラズ精巧ナルヤ又此土器ノ他
ニ發見セラル、モノナキヤ等ノ疑問ヲ起サズ從テ此等
ノ事項ニ關スル考説ヲモ記セズ單ニ愛玩ノ具ニ供セシノ
ミコレガ今回此地ノ探究ニ從事セシ所以ナリトス
余ガ陸奥西津輕郡龜岡村ニ着セシハ實ニ明治二十二年
七月二十三日ナリトス其日直ニ古來ヨリ土器ヲ發掘セシ
地ヲ巡檢シ翌二十四日ヨリ三十一日迄二十四人ノ人夫ヲ
使役シ同村宇龜山ノ發掘ニ從事セリ此地ハ即チ古來ヨリ
數多ノ土器ヲ得シ地トス而ノ此地タルヤ西方日本海ヲ距
ル一里東方山田川ヲ距ル亦一里許ニシテ俗稱風山ト稱ス
ル丘陵中ニアリ十三村ニ至ルノ邊際トス左ニ余ガ此地ヨ
リ發見セシ物品ヲ列記スレバ次ノ如シ

○土器ノ部 土偶 土偶ノ顔 全兩眼 全体ノ殘缺 德
利形ノ土器 高杯形ノ土器 甕 鉢 土壺
赤色ヲ染ル血ノ緣 殘片數多

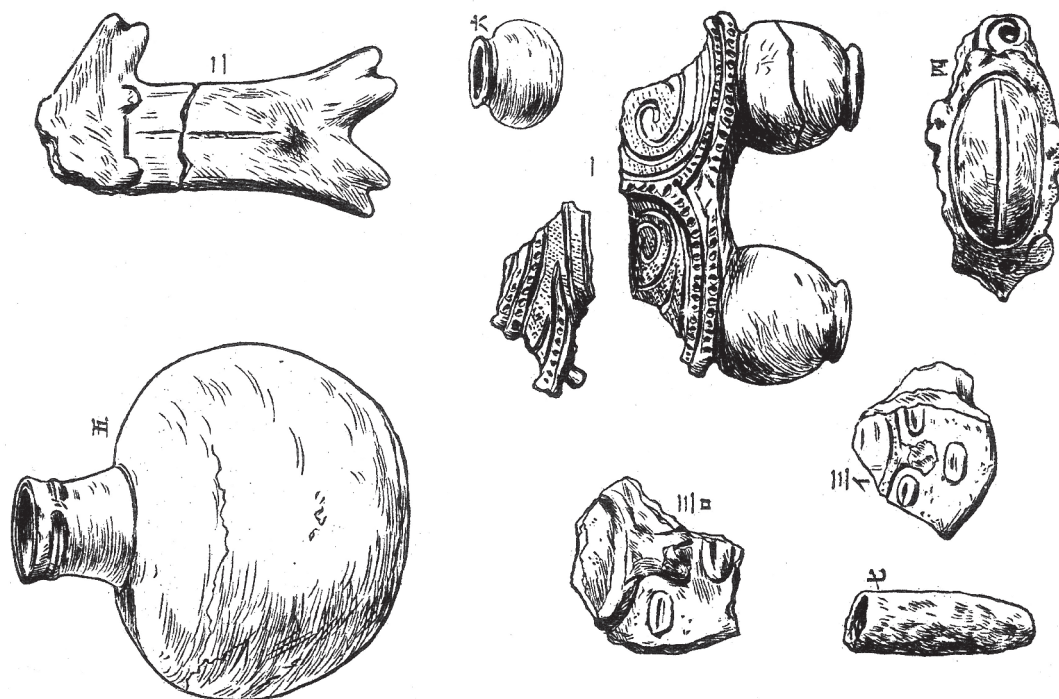
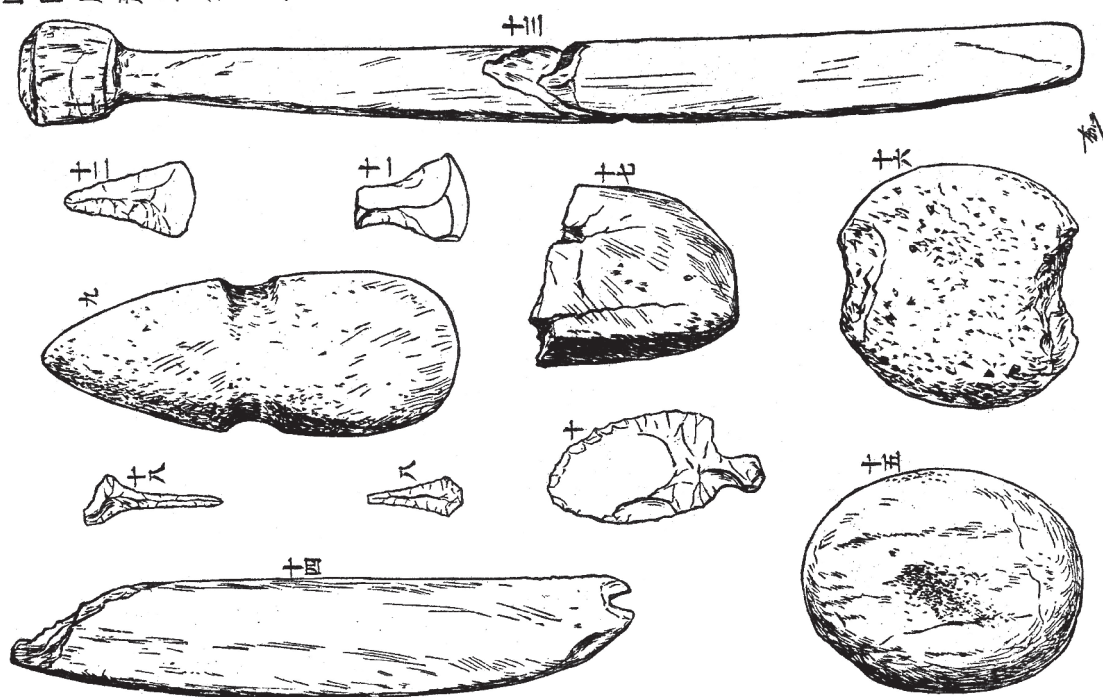
○石器ノ部 石鏃 石斧 石匕 皮剝具一種 石棒 石
鏃 磨刀類 橢圓形ノ凹ミアル石器 偏平
ニシテ兩端ヲ打欠キノ石器 未詳石器

○獸骨

余ハ次ニ此等ノ發見物ニツキ少シク略釋ヲ附セン
（土器ノ部） 古來ヨリ龜山ニ於テ發見セシ土製ノ器物ハ
土偶、甕、鉢ノ類ヲ多シトスコレ好事家ノ愛玩品ニ適セル
ヲ以テ發掘者モ亦注意シ採集セシニヨレリ故ニ殘缺ノ今
尙放擲シテ處々ニ散ズルヲ見タリ余ハ發掘ニ從事スルト
共ニ此等ノ殘缺ニ注意シ其中ヨリ土偶ノ顔、石器及ビ參
考トナルベキモノ數多ヲ得タリ
（第一圖）ハ土偶ナリ高さ二寸八分幅四寸五分トス僧裁頭
部ヲ失ヘリ片腕ヲ得タリ其衣服ヲ見ルニ古來ヨリ發見セ
ルモノニ異ナラス
（第二圖）ハ土偶ナリ前ノモノト異ナリ偏平ニシテ裝飾ヲ
表ハス處ナリ孔及前部ノ合セメヲ示ス首ノ部分ヲ失ヒオ
レリ高さ三寸七分幅一寸三分ナリ

（第三圖）ハ土偶ノ顔ナリ共ニ土器ノ殘缺中ヨリ得（イ）厚
二分五厘幅廣キ部分一寸八分體一寸トス然レモ幅廣ヘ周
圍ノ欠損セルヲ以テ異ヲ得ル能ハズ（ロ）ハ厚三分體一寸七
分幅凡一寸トス幅ハ欠損セルヲ以テ充分知ル能ハズ一ハ
鼻著シテ高ク一ハ喉著シテ大シ而ノ眉ノ連續セルハ等シ
（第四圖）ハ土偶ノ眼ノ一ナリ頭飾リ鉢ノ殘片共ニ一ヶ所
ヨリ得テ其各部ヲ檢スルニ皆テ此地ヨリ得タル最大ノ土
偶ニ大サ二倍セリ服飾ノ如キハ毫モ異ナルナシ（此土偶大
圖ハ東京人類學會ニ寄
附第二十號ヲ見ヨ）
（第五圖）ハ前ニ德利形ノ土器ト記セルモノニシテ高四寸
六分腹徑四寸三分ナリトス繩紋ナキモ其口ノ邊ニ飾ヲ施
シ赤色ノ染料ヲ塗リシ痕ヲ認ムベシ
（第六圖）ハ甕ノ最小ナルモノナリ高さ一寸一分腹徑一寸
三分五厘ナリ此等ハ香料ヲ入ル、ニ用井レナラン
（第七圖）ハ土壺ナリ高さ二寸二分口徑七分トス一方ハ塞
リテ底ヲナシ一方ハ開キテ口ヲナセリ
其他杯洗形ノ土器ハ高さ二寸口徑五寸アリ其精製ナルコ

此圖原形二分、一



ト九州地方ヨリ出ル流部土器ニ劣ラザルナリ又土器ノ底ニ大間ヲ入レンモノヲ得タリ又土器ノ縁ニシテ赤色ノ染料ヲ塗リシモノアリ化家學ノ分析ニヨレバコレ酸化鐵ニ少量ノ硅酸鐵ヲ含ミシモノナリト云フ傍ヨリ此染料數多ヲ得タリ

(石器ノ部)古來ヨリ龜山ニ於テ發見セシト云フ石器ハ世ニ見ルコト少シ故ニ此地ヨリ得ベキ石器ノ種類ヲ知ル能ハザリシガ今回充分ニ採集スルヲ得タリ

(第八圖)ハ石鏃ヲ示ス

(第九圖)ハ石斧ヲ示ス今回得レモノ、中形狀ノ異ナレシモノナリ腹面ノ凹ヘ柄ヲ附スルニ便ナラシメタルナラン

(第十圖)ハ石ヒラヲ示ス柄ノ部分ニ粘液ヲ附セリ柄ニ挟ムタメナラン而シテ其用ハ十一圖十二圖ト全シク皮剝具ナラン

(第十一圖)ハ皮剝具ノ一種ヲ示ス形狀ニ於テハ通例ノ石鏃ト認ムルモ幅廣キ部分ニ刃ヲ有セリ

(第十二圖)モ亦皮剝具ノ一種ヲ示ス幅廣キ部分刃ヲ有ス

○豫章縣志 豫章縣志 豫章縣志

(第十三圖)ハ石棒ヲ示ス長キ一尺二寸八分幅九分トス此ノ如キ石棒ハ特ニ興羽地方ニ多シ頭部多少ノ彫刻ヲ施ス

(第十四圖)ハ庖刀ノ類ナリ長キ七寸七分幅一寸九分トス左右ノ端少シ欠損セリ刃ハ鈍シ

(第十五圖)ハ橢圓ノ凹ミアル石器ヲ示ス形狀ハ此類ヲ多シトス木實等ヲ碎タニ使用セシナラン極面ニ物ヲ打テシ痕アリ

第十六圖ハ偏平ニシテ兩 欠キシ痕アル石器ヲ示ス形狀圖ノ如キモノ通例ナリ只大小ノ差アルノミ

(第十七圖)モ亦第十四圖ノ類セシ庖刀ヲ示ス刃ハ鋭ク背ノ幅廣シ厚キ一吋〇五厘アリ

(第十八圖)ハ石鏃ヲ示ス上部處ニシテ尖レル方鋭シ

以上ハ予ガ龜岡ニ於テ新ニ發見セシ遺物ノ概略ナリ而シテ此等ノ他ニ骨鈎及鹿角ノ此地ヨリ出シテ見タリ

コハニ於テ予ハ左ノ事實ヲ知ルヲ得

第一 龜岡村字龜山ハ古代ノ土器ヲ發見スルノミナラズ石器、骨器、獸骨ヲモ發見スルコト

五〇三

第一 此地ヨリ得ル土器ハ石器ハ皆本邦石器時代ノ遺蹟ヨリ發見スルモノニ等シキコト

第二 土器ハ皆精巧ニシテ本邦石器時代ノ土器中其比ヲ見ル少キコト

第三 土偶ヲ數多發見ス而シテ其服飾ハ當時ノ風俗ヲ見ルニ足ルベキコト

第四 石器ハ皆精製ニシテ龜山石器ハ一モ偶セザルコト

第五 獸骨ハ發見スルモ貝殻ハ一片モ發見セズ貝探タリシ証ヲ認メザルコト

以上ノ事實中土器石器ノ精巧ナルヲ見レバ當時ノ人民ハ新石器時代ニ屬スルヲ知ルベシ土偶ノ服飾ヲ見レバ全クアイヌ人ト異ナルヲ知ルベシ又其土器製法ノ進歩セルハ現今ノアイヌ人が技術ト大差アルヲ見ルナラン之ヲ要スルニ此地ハ關東地方ニ散在セル石器時代ノ遺蹟ト時代ヲ等フスルモ遙ニ後期ニ屬スルモノナルヲ認メタリ然レモ其人種ニ至テハ容易ニ斷言スベカラズ予ガ其遺物ニヨ

○眼鏡ニ就テ

リ調査セシ結果ニヨレバ此地ハアイヌ人ノ遺跡ト認ムルヨリハ寧ロ他ノ人種ノ遺蹟ト認ムルニ如カザルナリ

○

本題ハ長野縣稻垣貞氏ノ質問ニシテ本誌第九十六號第百十三回ニ掲ゲタリシガ今回眼科專門河本教授ノ詳細ナル答復ヲ得タリ然ルニ近來本邦ニ於テ眼鏡ヲ用ユルモノ日ニ月ニ増加スルヲ以テ特ニ本欄ニ載セ讀者諸君ノ一覽ニ供ス

編者識

眼鏡ニ就テ

醫科大學教授 河本重次郎

健康ノ眼ナレバ有色眼鏡ヲ用ユル必要アテ健眼ハ白色光線ヲ恐レズ有色眼鏡中靑色ヲ可トス其何色ノ光線ニ關セズ光力ヲ減殺スルヲ以テナリ、靑色モ亦可ナリ、靑色ノ眼鏡ハスペクトル中ノ中赤黃部ノ光線ヲ收奪シテ靑紫部ノ光線ヲ通スルノ多キヲ以テナリ、靑色ノ光線ハ赤黃ニ比スレバ冷淡ナリ質素ナリ網膜ノ感度少シ靑ハ暗闇ニ及ブモ他ノ色ニ比シテ消失セザル久シ、此事有名ノ理家ト

五〇四